

## 地域ボランティアプログラム① 松木日向緑地プログラム

# 「事前学習Ⅱ」 報告

2018/08/09



## 松木日向緑地プログラム 事前学習Ⅱ

8月9日（木）、本センター独自のボランティア活動の1つである地域ボランティアプログラム①「松木日向緑地プログラム」の事前学習Ⅱを南大沢キャンパス6号館104教室にて、実施しました。

今年度で3年目となるこの活動には、3年目の学生（リーダー）が3名、2年目の学生（サポーター）が2名、1年目の学生が14名参加しています。プログラム参加学生は、この事前学習に参加し、これからの活動に向けて必要となる知識や技能を学んでいきます。

松木日向緑地での緑地保全活動や緑地が抱える問題、南大沢地域の歴史と現状等について、本学の理学部生命科学科／牧野標本館 助教の加藤英寿先生と連携団体である「ひなた緑地遊学会」代表の北出進さんに講師として、お話しいただきました。さらに、オブザーバーとして、「認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK」理事・事務局長の鹿住貴之さん、ひなた緑地遊学会の老沼さん、戸田さん、道山さんにご参加いただき、学生の疑問や考えに対して、ご助言をいただいたり、最新の情報を提供していただいたりしました。

### ・昨年度の活動について

まず初めに、昨年度からこの活動に参加している2年目の学生（サポーター）から、昨年度の活動についての説明がありました。かつて松木日向緑地は、地域住民の生活に利用され、地域住民の手で整備されていました。しかし、都立大移転後に、自然と地域住民の交流が断たれ、里山が荒廃していったという背景があります。3年目の学生が考案した「緑から縁を」という合言葉が表すように、本プログラムが緑地保全活動を通した多世代交流に取り組む活動であることを、遊学会の方との竹の伐採や小学生対象の水鉄砲合戦などの事例とともに説明していました。

### ・竹林管理とひなた緑地遊学会

加藤先生からは、「首都大キャンパス内緑地における竹林管理への取組」についてお話しいただきました。松木日向緑地には、過去に人が植えたモウソウチクやマダケが密生・拡大しているといった現状があります。これまでの生態系を維持

し続けていくためにも、人の手で竹の管理をしていかなければなりません。そこで、加藤先生が緑地管理の協力者募集のチラシを学外の方も通行する掲示板に掲示したところ、北出さんから連絡があり、2010年に設立されたのが「ひなた緑地遊学会」です。

北出さんからは、ひなた緑地遊学会として、現在行っている活動とその成果についてお話しいただきました。ひなた緑地遊学会では、緑地保全活動だけでなく、地域の子どもたちが主体的に自然に関わりながら遊んだり、学んだりできる体験活動の支援にも取り組んでいます。昨年、本プログラムで行った水鉄砲合戦もその一つです。地域の開発により、住民同士の交流機会が減少していることを踏まえ、自然と人の関わりから、人と人の交流をつくっていくことの大切さについて教えていただきました。

### ・全体での話し合い

最後に、参加学生がそれぞれどのような思いをもってこのプログラムに参加したのかや活動に対する学生の疑問、緑地が抱える問題について、全体で共有しながら話し合いました。

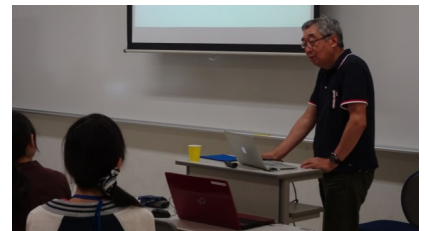
加藤先生が話されていた緑地保全活動の課題の中に、「人の手による伐採」や「板の埋設による地下茎の遮断」には多大な労力が伴うため、竹林の密生・拡大を防ぎきれないということがありました。薬剤を使用することにより、少ない労力で竹を枯らすこともできますが、今度は、安全なだけのこが収穫できなくなります。

学生たちは話し合いの中で、ひなた緑地遊学会の方から公園の生態系保全活動の実態を聞いたり、オブザーバーとして来ていただいた鹿住さんから全国で行われている緑地保全活動の事例を聞いたりしながら、私たちが自然から受けている「恵み」と人や他の動植物の生活への影響のバランスについて深く考えていました。「これが正解」といった答えがないからこそ、自分たちがこれから、松木日向緑地とどのように関わっていくかを考えていく必要があります。

ひなた緑地遊学会の方々や近隣の小学生など、多くの人と関わる中で、学生一人ひとりがそれぞれの思いをもって主体的に活動していければと思います。



講師の加藤 英寿先生



講師の北出 進さん



オブザーバーの鹿住 貴之さん



本プログラムへの参加動機の中には、「小学生の時にキャンプで自然と関わった経験から、緑地保全に関心をもった」、「公園をつくりたい」という夢がある、「人と自然のつながりについて学びたい」、「大学と地域の交流における実態を知りたい」などがありました。

4月にプレ企画として行った「みんなで一緒にたけのこ掘りin首都大」の参加者もあり、松木日向緑地への関心も高いように感じました。